

機関番号：23903

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02977

研究課題名(和文)日本人学習者のウェブ上英語ライティング行動における「読み手意識」の長期的発達

研究課題名(英文) Effects of web-based communication tasks on the development of a sense of audience in L2 writers

研究代表者

佐々木 みゆき (SASAKI, Miyuki)

名古屋市立大学・大学院人間文化研究科・教授

研究者番号：60241147

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、第2言語での作文をオンライン上で交換するe-tandem(双方向2言語通信)という形式が、学習者の読み手意識をどのように発達させ、さらにそれが他のアカデミックライティングにどのように転移し得るかを調査することを目的とした。当初の目的を超え、日本語学習者行動も合わせて調査した結果、(1)e-tandem形式は、オンライン上の「読み手意識」を向上させた。(2)アカデミックライティングへの転移に関しては、A.以前に読み手意識について学んだことがなく、B.作文のプロンプトに読み手に関する情報が書いてあった場合、C.「読み手にわかりやすく書こうとする」操作が最も転移しやすいことがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の結果は、先行研究がほとんどないため、我が国だけでなく、様々な場面での第2言語ライティング教育に先駆的示唆をもたらすと思われる。読み手の背景に配慮し、自分の意図を英語で正確に表現する力の発達過程を調査する本研究の結果は、現行の学習指導要領が推進する「表現する力」を効果的に養成する方法を探るのに有効である。

研究成果の概要(英文)：The purpose of the present study is to investigate how L2 writers develop audience awareness while engaged in online writing and whether they transfer such awareness to classroom writing. Results indicate that: 1) all participants improved their sense of audience as a result of online writing; and 2) they transferred this sense of audience to classroom writing but only if: a) their original sense of audience was very low; b) the writing prompt included information about the audience; and c) participants limited their scope to audience comprehensibility (as opposed to audience effectiveness).

研究分野：人文学

キーワード：第二言語習得理論 e-tandem 読み手意識 意見文 転移

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

インターネットの発達により、近年、第2言語の教育においては、「表現する力」の発達が注目されているが、第2言語学習者がリアルな場面で書く時にどのように「読み手意識」を発達させていくかについて調査した研究や、ある特定のジャンル(例:ウェブ上のブログ)で発達した「読み手意識」が他のジャンル(例:ア意見文)に転移可能なのかを調査した研究は、皆無であった。

2. 研究の目的

本研究は、第2言語での作文をオンライン上で交換する e-tandem(双方向型2言語通信)という形式が、学習者の読み手意識をどのように発達させ、さらにそれが他のアカデミックライティング(意見文)にどのように転移し得るかを調査することを目的とした。又、2年目からは、学習者の読み手意識の長期観察を続けつつ、我が国の英語教育が目指す「まとまった内容をわかりやすく伝えるため英語表現力」を効率的に発達させるための工夫を備えた SNS サイトの開発も目指した。

3. 研究の方法

以上の背景と目的を踏まえ、以下の3点を明らかにした。

- (1) ウェブ上で e-tandem で、母語話者と交流する場合、ウェブ上での「読み手意識」は発達するか。
- (2) もし発達するならば、その「読み手意識」は、別のジャンルであるアカデミックライティングに転移(同じように意識)するか。
- (3) どのような要因(例:「読み手意識」の低さ、第二言語能力)が、ウェブ上や、アカデミックライティングにおける学習者の「読み手意識」の発達に影響を与えるか。

参加者としては、大学生それぞれ6人ずつの実験群(毎週一回、オンラインで e-tandem 双方向形式で母語話者と作文をやりとり)と統制群(オンライン上で毎週一回読み手無しで作文を書く)を6週間比較した(H29年度が日本語学習者とH30年度が英語学習者)。当初の目的を超えて、2つの学習言語での比較が可能となったのは、H28年度(安倍フェローシップを受給して滞在)とH29年度に、本研究者が米国に滞在した際にデータ採取の機会を得たためである。「読み手意識」の定義としては、本研究者が共同研究者と長年の研究で培った研究結果(Sasaki [et al, in press])として出版予定)をもとに、Audience Image, Audience Comprehensibility, Audience Effectiveness の3つ側面を問うアンケートを使用した(Tables 1と2参照)。

4. 研究成果

(1) H29年度の日本語学習者を対象とした主な研究結果は、以下のAとBである。

- A. 母語話者と6週間 e-tandem で交流した実験群全員が、読み手を意識するようになり、6人のうち5人(83.3%)が日本語で書くことに意欲が増した。
- B. Table 1にあるように、母語話者と交流しなかった統制群の方だけが、6週間のオンラインライティングの後、アカデミックライティング(意見文)において、読み手をさらに意識して、わかりやすく(Item B)、効果的に(Item C)書こうとした。母語話者と e-tandem で交流した実験群にはそのような変化は見られなかった。

Table 1. 日本語学習者の「読み手意識」アカデミックライティングへの転移

Item (five-point Likert scale) 5点満点	グループ (n = 6)	e-tanden 前 M (SD)	e-tanden 後 M (SD)
Item A (Audience Image): この英作文を読む人はどんな人だろうと考えた。	実験群	2.33 (.52)	2.83 (1.47)
	統制群	2.14 (1.46)	2.57 (1.14)
Item B (Audience Comprehensibility): この英作文を読む人のためには、どんな文章を書けばわかりやすいか、考えた。	実験群	3.33 (1.37)	3.50 (1.22)
	統制群	2.43 (1.27)	3.29* (1.22)
Item C (Audience Effectiveness): この英作文を読む人のためには、どんな文章を書けば効果的か、考えた。	実験群	3.17 (1.17)	3.33 (1.21)
	統制群	2.64 (1.03)	3.57* (.93)

この予期しなかった結果は、内部妥当性的には、オンライン、アカデミックライティングともにプロンプトに読み手に対する情報があったこと[それをサポートするデータとしては、6人の統制群のうち4人が、6週間の読み手なしのオンライン・ライティング後には、プロンプト(題)の読み手に関する情報を意識するようになったと言っており、実験群の誰もそんな事は言っていないことがあつた]、外部妥当性的には、統制群が統計的に有意に伸びたItem BとCでは、統制群の実験前の値が実験群に比べて低く e-tandem 後の伸びが大きい(Table 1のグレイの部分)ことが挙げられる。この後者は(実験前に読み手意識が比較的低い学習者は、読み手意識の伸びが大きい)は、同じような結果が Sasaki, et al (in press)でも見つかっている(Sasaki, et al では実験群で見つかっている)。

(2) H30年度の英語学習者を対象とした研究結果は以下のCとDである。

- C. 母語話者と6週間 e-tandem で交流した実験群全員が、読み手を意識するようになり、6人のうち4人(66.7%)が英語で書くことに意欲が増した。
- D. Table 2にあるように、母語話者と交流した実験群も交流しなかった統制群の方も、6週間のオンラインライティングの後、アカデミックライティング(意見文)において、よりわかりやすく(Item B), 効果的に(Item C)書こうとした。ただし、実験群は、読む人にわかりやすく書こうとする「読み手意識」をより伸ばした。

Dに関しては、e-tandem で読み手と交流した実験群も交流しなかった統制群も「読み手にわかりやすいように書きたい(Audience Comprehensibility)」と「読み手に効果的に書きたい(Audience Effectiveness)」読み手意識を統計的に有意にアカデミックライティングに転移しており、オンラインライティングからアカデミックライティングへの転移に関しては、(1)の結果とも考え合わせると、実際の読み手と交流したことより、元々の読み手意識が低かったこと(Table 2のグレイの部分)の方が、より関係していることがわかる。又、統制群に関しては、(1)の実験の時のように、6人中3人(50%)が、6週間のオンライン・ライティング後は、プロンプトにあった読み手の情報を意識するようになったと言っており、実験群にはそのように言った参加者がいないことから、「オンラインとアカデミックライティング両方のプロンプトにあった読み手に関する情報」も、読み手に関する意識を高めたと思われる。この結果は、特に我が国の英語教育において多くのことを示唆していると思われる。

Table 2. 英語学習者の「読み手意識」アカデミックライティングへの転移

Item (five-point Likert scale) 5点満点	グループ (n = 6)	e-tandem 前 M (SD)	e-tandem 後 M (SD)
Item A (Audience Image): この英作文を読む人はどんな人だろうと考えた。	実験群	1.67 (.82)	2.17 (.75)
	統制群	2.00 (1.26)	2.17(.75)
Item B (Audience Comprehensibility): この英作文を読む人のためには、どんな文章を書けばわかりやすいか、考えた。	実験群	2.17(.98)	4.83**(.41)
	統制群	2.00 (1.01)	4.33** (.82)
Item C (Audience Effectiveness): この英作文を読む人のためには、どんな文章を書けば効果的か、考えた。	実験群	2.00(.89)	4.33* (.82)
	統制群	2.17(.983)	3.00* (.63)

** p < .001 ; * p < .01

(3) H29年度とH30年度の研究結果を総合して言えること

2つの実験結果を総合して、以下のような暫定的結論を得ることができた。

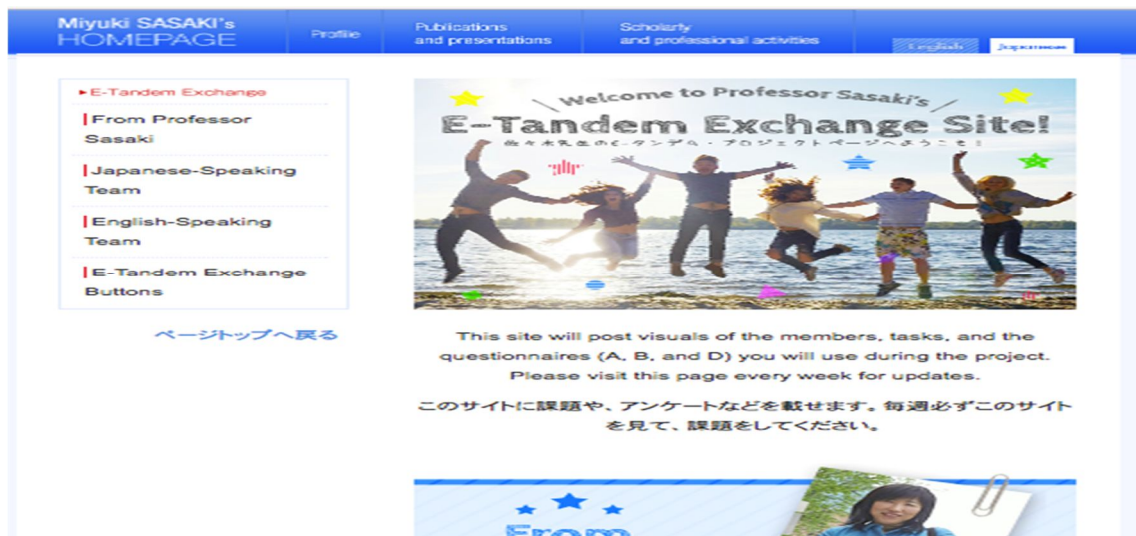
- I. 外国語として第二言語を学ぶ学習者に読み手意識を発達させるためには、e-tandemのような双方向型の長期的やりとりは有益であり、書くことへの動機づけも向上させる。
- II. もし e-tandem の相手を見つけられない場合は、作文のプロンプトに読み手に関する情報を与えて考えさせるだけでも、読み手意識の希薄な学習者の読み手意識は向上する。
- III. II の場合は、読み手意識の中でも、「読み人にわかりやすく書く」という読み手意識が特に向上しやすい。

2つの実験は、実験条件が複雑なためサンプル数が小さく、今後さらなる検証が必要である。しかし、本研究では、ほぼ同じような環境(外国語環境で学ぶ大学生)で学び、同じくらいの学力(母語話者とライティングで交流できる中級以上の学力)を持つ2つの学習言語を第一言語と第二言語を交換する形で調査観察することができるという稀な研究環境が与えられたため、大変貴重な研究成果が得られた事は確かである。

〔その他の成果〕

本研究のその他の成果として、佐々木 HP 上

<http://miyukisasaki.com/ja/index.html> の ID と PW を必要とするサイト Projects 1-2 に e-tandem 用の Platform を作成したが、個人情報保護のため、一部の画像のみ以下に添付する。



5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 5件/うち国際共著 3件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Miyuki Sasaki	4. 巻 8
2. 論文標題 Application of diffusion of innovation theory to educational accountability: the case of EFL education in Japan	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Language Testing in Asia	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 0.1186/s40468-017-0052-1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 SASAKI MIYUKI、MIZUMOTO ATUSHI、MURAKAMI AKIRA	4. 巻 102
2. 論文標題 Developmental Trajectories in L2 Writing Strategy Use: A Self-Regulation Perspective	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 The Modern Language Journal	6. 最初と最後の頁 292 ~ 309
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.1111/modl.12469	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する
1. 著者名 Yuki Higuchi, Miyuki Sasaki, Makiko Nakamuro	4. 巻 17-E-030
2. 論文標題 Impacts of an ICT-assisted program on attitudes and English communicative abilities: An experiment in a Japanese high school	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 RIETI Discussion Paper Series	6. 最初と最後の頁 1-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Miyuki Sasaki, Yoko Kozaki, Steven Ross	4. 巻 101(1)
2. 論文標題 The impact of normative environments on learner motivation and L2 reading ability growth	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 The Modern Language Journal	6. 最初と最後の頁 163-178
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/modl.123810026-7902/17/163-178	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Sasaki Miyuki, Baba Kyoko, Nitta Ryo, Matsuda Paul Kei	4. 巻 43
2. 論文標題 Exploring the effects of web-based communication tasks on the development and transferability of audience awareness in L2 writers	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Australian Review of Applied Linguistics	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.1075/aral.18035.sas	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計8件 (うち招待講演 6件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 Miyuki Sasaki
2. 発表標題 Development of L2 writing strategy use: Shared patterns and uniqueness
3. 学会等名 Public Research Talk, School of Languages and Linguistics, University of Melbourne (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Miyuki Sasaki
2. 発表標題 Development of L2 writing strategy use: A mixed methods approach
3. 学会等名 Symposium on Academic Writing in an L2 Context. University of Tokyo (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Miyuki Sasaki, Atsushi Mizumoto
2. 発表標題 Longitudinal development in L1 and L2 writing: Shared patterns and individual differences
3. 学会等名 American Association for Applied Linguistics Annual Conference (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Miyuki Sasaki
2. 発表標題 Effects of study-abroad experiences on L2 writing: Insights from published research
3. 学会等名 Public Research Talk, Department of Linguistics, Georgetown University (招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Miyuki Sasaki
2. 発表標題 第2言語ライティング教育最前線: 長期的観察に見られるパターンと個人差
3. 学会等名 JACET Kansai Chapter Spring Conference (招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Miyuki Sasaki
2. 発表標題 L2 writers in study abroad contexts: Insights from recent studies and pedagogical implications
3. 学会等名 E-Link Talk, Kansai University (招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Miyuki Sasaki
2. 発表標題 What causes scoring discrepancies between trained raters? Comparing rating mechanisms in L1 Japanese and L2 English composition assessment
3. 学会等名 Symposium on Second Language Writing (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Miyuki Sasaki
2. 発表標題 Measuring L1-L2 writing development with new longitudinal cluster analysis statistics
3. 学会等名 Invited Public Research Talk, Department of Linguistics, Georgetown University (招待講演)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 Miyuki Sasaki (pp. 161-180のChapter 8を担当)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 De Gruyter Mouton	5. 総ページ数 648
3. 書名 The Handbook of Second and Foreign Language Writing	

1. 著者名 Miyuki Sasaki (pp. 138-155を担当)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 259
3. 書名 Transnational writing education: Theory, history, and practice	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----